

2020 年度の主な新聞記事

朝日新聞 2021年2月4日 朝刊 21 ページ 京都

龍大生、復興支援の活動報告

6日 オンラインフォーラム



東日本大震災で子どもを亡くした男性から話を聞く龍谷大の学生ら＝2019年9月、宮城県石巻市、ボランティア・NPO活動センター提供

東日本大震災の被災地でボランティアを続けてきた龍谷大（伏見区）のボランティア・NPO活動センターが6日午後1時から、活動の意義を考えるフォーラムをオンラインで開く。復興支援に携わった学生らが、経験を報告する。

同センターは2011年6月以降、宮城県石巻市でボランティアツアーを企画。参加した学生や教職員は延べ692人を超える。地元住民の運動会のサポートや灯籠流しの運営などに携

わる一方、震災の教訓を将来に生かすため、被災者から体験を聞き、学内で発表してきた。

今回、報告する法学部4年の吉田樹さん(22)は、震災で娘を失った男性から体験を聞いた。避難していは助かったという裏山にも登った。多くの人が犠牲になったデータは知っていたが「大切な人が一人ひとり亡くなったという実感があった」という。

17、19年に参加した政策学部4年の川村有希さん

(22)は、被災者から災害時にほしい飲料を聞き、はった。水やお茶だと思っていたが、答えは「水とカロリーをとれるジュース」。思い込みを捨て、被災者の言葉に丁寧に耳を傾ける大切さを学んだという。

小学6年の次女を失った佐藤敏郎さんも「3・11を学びに変える」と題して講演する。4日までに同大のホームページから申し込み。無料。問い合わせは同センター(075・645・2047)。(高井里佳子)

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

2021年2月4日 朝日新聞 提供

東日本大震災から10年

「震災の経験を知恵に」

龍谷大学が復興支援フォーラム

宗門校の龍谷大学（入澤理事長、京都市伏見区）は2月6日、東日本大震災から10年を迎えるにあたり復興支援フォーラム「あらためて震災を振り返り、その経験を知恵とする」をオンラインで開催した。津波で命を亡くした男性や学生ボランティア経験者らが、日頃からの備えの大切さを語った。

龍谷大学では、学生ボランティアによる宮城県石巻市での復興支援活動、福島県被災地の現状を学ぶ「福島スタディツアー」など、2011年から現在まで、のべ778人の学生・教職員が被災地を訪れている。

在学中、ボランティアに参加した白土奈央さん（26）は現在、千葉県の特設支援学校で教諭を務めている。「復興支援活動経験が、今の自分にとってなっているのか」をテーマに、赴任後の防災訓練を振り返った。「学生ボランティアの経験もあり、災害時の動き方は自分なりに考えていたつもりだった。しかし、いざ行動に移すとパニックで何もできなかった。担当するクラスには目や耳が不自由な生徒もいて、どの手を優先してサポートすべきか、生徒がパニックになったらどうすべきかなどの想定ができておらず、生徒を守る決意が足りなかったことを思い知らされた。東北でのボランティア経験を見つめ直し、日頃から災害に備えておく大切さをあらためて学びたいと話した。津波に襲われ全校児童108人のうち74人が死

「今、防災の種をまいておく」

亡・行方不明になった宮城県石巻市大川小学校、当時6年生の次女を亡くした佐藤敏郎さん（58）が「3・11」を学びに変える」と題し基調講演を行った。「（地震から2日後の）13日の午後、津波のまじりに次女の遺体が見つかったと聞かされたが、何も理解できなかった。泥だらけになった遺体を見たときも、眠っているようにしか見えなかった。『起きろ』と何度も声をかけながら全く動かなかった。今でも受け止めていない。でも、その悲しみは乗り越えなくていいと思う。次女のこと、話をするとき一緒に過ごした思い出や失った悲しみ、私がこみ上げてくるのは、私の心の中で次女が生きていた証だ。これからはその悲しみと一緒に生きていく決めた」と次女への思いを語った。佐藤さんは、小学校で起きたことを多くの人に知ってもらい、そこから災害時の動き方を学び、それを共有しようと「小さな命の意味を考える会」を立ち上げた。

副司会、私は（隣町の）女川中学校に務め、卒業式の前日だった。教員も生徒も準備に追われる中

で震災が起きた。停電で校内放送は使えず、避難訓練で使っていた経路は窓ガラスの破片が散らばって通れない。しかしこれらのトラブルは、日頃から防災について考えていた龍谷に想定できることだったと痛感している。と振り返り、災害はいつ起こるかわからない。今も震災後ではなく、震災前かもしれない。この災害で災害の間であらう「防災」のうちに防災の種をまいておくことが大切。正しく避難する」で守れる命、変えれる未来がある」と語った。

また、阪神・淡路大震災でのボランティア活動を経験した龍谷大学社会福祉協議会の長谷部裕さん（47）は、これからのボランティアは、いろいろな団体と協力しながらの活動が求められる。長野のりんご畑の復興支援では、農家や地域の人が取り組む。農地の復旧が可能になる。コロナ禍を乗り越えていくためには、模索していかねばならない」と話した。

同大学ボランティア・NPO活動センター長の筒井の子教授は「体験を互いに語り合うことで、さらに深い学びに変えていくとあらためて感じた。今後も全力で学生ボランティアをサポートしていくと約束した。（8面に関連記事）



復興支援フォーラムでスタッフに

宗門校・龍谷大学の復興支援フォーラムで学生スタッフを務めた（左から）濱田葵さん（2年）と伊野涼雅さん（1年）、井関萌乃さん（同）。学生が行った震災直後から10年間の活動を収めた写真2万枚や現地を訪れたボランティア経験者へのインタビューを動画にし、上映した。



濱田さんは昨年福島を訪ね、原発に関して多様な意見があることを聞いた。「『復興』といってもいろんな考えがある。それを多くの人に伝えたい」。動画編集を担当した伊野さんは「今はコロナで現地に行けないが、先輩方の活動を多くの人に見てもらい、支援の輪が広がれば」。

広島出身で平成30年7月豪雨を経験した井関さんは「災害の怖さだけでなく、復興支援ボランティアを通じて生まれる笑顔があることも伝えたい」。

「10年の歩み」は受け継がれている。（1面に記事）

2021年3月1日 本願寺新報 提供

祭りの伝統継承考える

「左義長」縮小 龍大生が体験学習

コロナ禍で中止された祭りの伝統継承について大學生が考える体験学習プログラムが、近江八幡市の旧市街地であり、龍谷大の學生10人が参加した。毎年3月中旬に開催されている織田信長ゆかりの「左義長まつり」の保存会からコロナが祭りに及ぼした影響の大きさや、地域の伝統を守る取り組みについて話を聞いた。

左義長まつりは、同市の旧市街地を中心に、3月中旬に2日間の日程で開催される祭り。町ごとに工夫を凝らして小豆や昆布などの食材で飾り付けて製作した左義長と呼ばれる山車13基が町内をめぐり、日牟禮八幡宮の内外で激しくぶつかり合う奇祭。クライマックスの2日目夜には、左義長に火がかけられ、幻想的な雰囲気包まれる。

信長も好んで町衆と躍り出たと伝わる伝統の祭りだが、今年はコロナ禍で規模を大幅に縮小。町ごとの左義長の製作を見送り、巡行も取りやめる。当日は神事のほか、展示用の1基を境内で燃やす予定という。

學生は、苦渋の決断に至るまでの議論の過程や、「子供が地域を愛するきっかけを失いたくない」と訴える保存会のメンバーの話に耳を傾けながらノートにペンを走らせていた。

プログラムに参加した農学部1年の柿沼萌香さん(19)は「地域が丸となって伝統を守っていると分かった」と感慨深げに話していた。

講師役を務めた同大文学



左義長まつり保存会のメンバーから話を聞く龍谷大の學生。近江八幡市



平成30年の左義長まつり

部OBで保存会の安田晴彦さん(66)は「若い學生が関心を持ってくれて、ありがたい。専門的な内容の意見交換もできたら」と今後に期待を寄せていた。

2021年3月8日 産経新聞 提供

日常生活でもできることを

命を守る行動 考えたい

京都新聞

大学の復興支援ボランティアとして宮城県石巻市雄勝町を3年連続で訪れ、人手不足で存続の危機に一時直面した伝統行事「雄勝湾灯籠流し」を手伝い、語り部の証言を聞いてきた。大学の文化祭では被災地の写真展示ブースを設け、見聞きしたことを伝えた。

卒業後は防災活動の場がなくなってしまうが、今回、「自分たちで新しい場を作った」「防災はあくまで日常生活の延長線上にある」との助言を得て視界が開けた。

4月から滋賀県の高齢者福祉施設で働く。寝室から玄関先まで送れる高知県黒潮町の「日本一短い避難訓練」など各地の事例も参考にしながら、自分と周囲の命を守るために何ができるのかを考えていきたい。(森敏之)

龍谷大4年・復興支援ボランティア

川村 有希さん(22)



神戸新聞

1.17希望の架け橋代表

藤原 祐弥さん(19)



出前授業で「阪神」伝承

今回、もうすぐ春休みだが、被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

北海道新聞

北海道教育大釧路校4年

佐藤 愛佳さん(23)



教子と危険箇所確認

所屬する命の危険箇所を確認する。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

東京新聞

カタリバ女川向学館副拠点長

芳岡 孝将さん(36)



他地域と交流記憶録

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

神奈川新聞

3.11つなぐべし高校生代表

井ノ上敦也さん(17)



楽しんで学ぶ場をつくる

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

福井新聞

福井高専専攻科1年

水島 美咲さん(21)



コロナ禍での避難考察

2019年に被災地を訪ね、避難生活を送った。今回の活動で、被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

高知新聞

高知大学防災すけっと隊副代表

佐野 太亮さん(20)



車中泊挑戦 SNS発信

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

宮崎日日新聞

宮崎県わけもん防災ネット代表

白石 麻緒さん(22)



子ども食堂 非常食体験

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

感染対策との両立困難 現地入り控える動き



被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。

被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。被災地への思いが、復興支援活動の取組に繋がっている。



2021年3月9日 京都新聞 提供

東日本大震災10年

龍谷大生ら延べ778人 被災地に派遣

惨事 目を背けないで

復興を支えて

3・11から10年

田



被災地でボランティアや研究を続けてきた筒井さん（右）。スタディーツアーに参加した朝倉さん（左）、大橋さんと福島での経験を振り返る（大津市で）

「自然豊かで美しい故郷に長い間、帰ることができない人がいる。あまりに理不尽だ」
龍谷大社会学部教授の筒井のり子さん（62）は言葉に力を込める。
2001年に「ボランティア・NPO活動センター」を設立した龍谷大はこ

筒井さん 支援あり方研究



スタディーツアーで梨農家（右）から被災状況を聞く学生たち（2020年2月、福島市で）＝龍谷大提供

の10年間、福島県や宮城県石巻市に学生や教職員延べ778人を派遣してきた。同センター長を務める筒井さんも、東日本大震災の復興に深く関わってきた。ボランティアや研究で、福島を訪ねたのは約50回を数える。

◇

地域福祉が専門で、普段は瀬田キャンパス（大津市）で教鞭を執る。阪神大震災（1995年）では、発生直後から約3か月、兵庫県内でボランティアコーディネーターを務めた。被災

地のニーズを調べ、各地から集まるボランティアを適切に配置する役割だ。

東日本大震災でも、その経験を生かそうと、発生直後から、福島県災害ボランティアセンターの情報紙の発行に手弁当で携わった。

被災者の支援のあり方などの研究を進めたほか、生活支援相談員を対象とした研修を企画し、講師も務めた。仮設住宅や避難所で暮らす数多くの人から話を聞いた。「3日程度で帰れると思っていたのに何年も帰れないなんて」などの被災者の言葉に、福島第一原発事故の影響の大きさを再認識した。「厳しい現状から目を背けてはならない。どんな形であっても、福島と関わり続けなければ」と固く決意した。

◇

15年度からは、福島へのスタディーツアーが始まった。提案したのは筒井さん。「自分たちが住む国で起きている惨事を知り、考えることで、人間として成長してほしい」と考えたからだ。学生たちは4日間、福島県の農家や企業、福祉施設、NPO団体などを訪ね、様々な立場の被災者から話を聞く。

社会学部4年朝倉勇人さん（22）は大学1年時の18年、同じ学部の大橋寛海さん（22）を誘って活動に参加して以来、毎年福島に足を運ぶ。

2人は「人の姿がほとんどなく、時が止まったままの帰還困難区域を見て衝撃を受けた」「行き場のない悲しみや怒りを抱え、それでも前向きに生きる姿に感銘を受けた」と口をそろえる。

20年度はコロナ禍で中止となったが、19年度までに74人の学生が南相馬市や浪江町など6市町村を訪れた。学生が書いたリポートは、大学側がまとめて被災者に送っている。筒井さんは「福島の人から『学生に話すことで、自分の内なる声に耳を傾ける、貴重な機会を得た』との声も聞いた。学生たちは深く考え、自分の言葉で語るようになった」と話す。

スタディーツアーなどの活動は、今後も続く。「原発事故はまだ終わっていないので」。福島の復興に関わり続けることを、ライフワークにするつもりだ。

（松山春香）

2021年3月11日 読売新聞 提供

伝
統
継
承
へ

コロナ禍の左義長 話し合う

近江八幡 龍谷大生と保存会

保存会の安田さんらから左義長のダシについて説明を聞く龍谷大の学生たち＝近江八幡市で

今年は新型コロナウイルス禍で左義長の制作が中止となった、近江八幡市伝統の左義長まつり。左義長の歴史や魅力のほか、制作中止が及ぼす地域への影響を知ろうと、龍谷大の学生十人が、保存会の安田晴彦さん（左）、小原勇さん（右）と市内で懇談し、コロナ禍での伝統文化の継承について話し合った。

元教員の安田さんは「子ども頃は祭りを通じて出会った人にかわいがられ、その日常が続いていく。今は教える子の成長した姿を見るのも喜び」と魅力を紹介。今後の左義長制作について「稲わらや皮がついた丸太、ダシの材料となる海産物や穀物をどう確保していくか。制作期間は長めに取り、密にならない対策も

考えたい」と課題を伝えた。小原さんは「左義長の制作には百万〜百二十万円が必要で、町内の皆が出し合う。町内会費は高くなるが、地域でお金が動く。何とか続けたい」と話した。いずれも農学部一年で、三重県出身の三宅鈴香さん（左）は「街全体で盛り上がる祭りがあってのはうれしい」と語り、奈良市在住の岡本千聡さん（右）は「小さい頃の楽しい思い出が、幅広い世代の人をつなぐ原点になっていると感じた」と話した。（松瀬晴行）

2021年3月18日 中日新聞 提供

“自省利他”の心で活動を

設立20周年記念し交流会を開く

龍谷大ボランティア・NPO活動センター

10月に設立20周年を迎える宗門校・龍谷大学のボランティア・NPO活動センターは2月11日、記念事業として「ボランティアで未来を拓く」をテーマに交流会を開いた。コロナ禍のためオンラインで、入澤崇学長とフォトジャーナリスト・安田菜津紀さん(34)が対談を行い、今後のボランティア活動の在り方について語った。

誰のための希望を伝えるべきか。コロナ禍にも言えること。今の社会には『痛みを分かち合う』という実体の共感。ソシヤルディ



自省利他 自己中心的な自分を省みて、他者との関係性を重んじ、他者の幸福に資することを考え行動すること。

龍谷大学が2019年の創立380周年を機に掲げた、仏教の教えに基づいた新たな哲学。



龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

1 学生自らの成長と地域社会への貢献を目的に2001年10月に設立。教員・職員・学生の3者共同運営で、深草キャンパス(京都市伏見区)と瀬田キャンパス(滋賀県大津市)にセンターを置き、ボランティアコーディネーション力検定1級または2級を有する専門職を2人ずつ配置する。そのほか、SNSを用いたボランティア情報の提供やボランティアリーダー養成講座の開講なども行っている。

ランティア活動に取り組んでほしい」と応えた。

このほか意見交換を行い、卒業生や在学生がボランティア活動から得た学びやアイデアを報告するなど、同センターの意義について語り合った。

2021年3月20日 本願寺新報 提供

龍谷大オンラインで福島学ぶ

宗門校・龍谷大学(京都市伏見区)のボランティア・NPO活動センターは3月5日、オンライン交流プログラムのつながる福島ースタディツアーに行けないからこそ福島を語ろう」を実施。学生14人が参加した。

同センターは毎年、福島県浪江町などの被災地を訪れ実情を学ぶスタディツアーを行ってきたが、コロナ禍で実施できないことから企画した。南相馬市で障害者の生活介護や就労支援に取り組むNPO法人「デイさぼーとぴーなっつ」の青田由幸代表が講演した。

「避難しろと言われても急には避難できない事情を抱えている方は、皆さんが思っている以上に多い。大切なのは、近隣住民同士がお互いのことを知っておくこと。そして、避難方法や避難先の環境、移動距離などを想定しておくこと。それが助かる道になる」と訴えた。

その後、学生たちはグループディスカッションを行い、自分たちが被災したときの動き方や災害関連死を防ぐ方法について意見共有をした。

2021年4月1日 本願寺新報 提供

海外スラム地区の現状学ぶ

龍谷大がオンライン交流プログラム

宗門校・龍谷大学（京大を併行し、現地の声に都市伏見区）のボラン

耳を傾けた。

ティア・NPO活動セ 例年は現地に赴き、

ンターは3月9日、フ 地域貢献、福祉、環境

イリピン首都マニラ 関連のNPO・NGO

にあるスラム・トン ドとの交流を通じてボラ

地区で子どもの教育支 ンティア活動に参加す

援や女性・若者の就労 るなど、異文化間の相

支援を行っているNP 互理解と共生を学んで

O法人アクセスとのオ いるが、コロナ禍で渡

ンライン交流プログラ 航できないため企画。

学生31人が参加した。 覚し、学業を諦めなけ

アクセス事務局長の ればならず、期待して

野田沙良さん(40)が活 くれていた祖父母を失

動内容を説明した後、 望させてしまった」な

トンド地区在住のジェ ども、これまでの苦悩を

イミー・アマンテさん 涙ながらに語った。そ

(21)から話を聞いた。 の後、質疑応答などを

ジェイミーさんは、 行った。

63万人が暮らし東南ア 参加した加田絢美さ

ジア最大の貧困地区と ん(4年)は、「私にも

いわれる同地区の住居 ジェイミーさんと似た

や町の生活様様を収め ような境遇の友人がい

た動画を上映し、「こ る。彼女たちに必要な

の地区は水道が引かれ のは、周りのサポート

ておらず、タンクを持 と学びを続けられる環

境づくりに思ふ」と 話した。

保しなればいけな

い。並んでいる家屋も また15日には学生26

自分たちで廃材を集め 人が、タイ南部のタレ

て建てたものがほとん ーノーク村でインド洋

ど」など、苦しい生活 大津波の復興事業を行

状況を語った。 う支援団体「ツナミク

また自身の生い立ち ラフト」代表の東山高

を振り返り、「小2の 志さんや村人たちが

ときに父親を亡くし、 ら、彼らが製作するフ

中3のときに母が違法 ェアトレード製品や、

薬物の使用により刑務 タイにおける新型コロナ

所に入った。それから ナウイルスの影響につ

まもなく私の妊娠が発

いて学んだ。